

(謄寫版菊版 一一〇頁、非賣品)(寺尾)

●薩道先生景仰錄 文學博士 新村 出著

今は亡きサー・アーネスト・サトー氏に捧げられた追想であつて、吉利支丹研究史回顧のサブタイトルを持つ。

著者の得意さるる書誌學的考察の中にも先人に對する敬愛の情がひらめいて情趣豊かなものとし、自ら人を引き入れる美しさを持つ。切利支丹文化の恩人への追悼にこよなき捧げ物云ひうるであらう。(四六版 五七頁、一・五〇 ぐろりあ、そさえて發行「藤」)

●明治十五年朝鮮事變と花房公使

武田 勝藏著

此著書は明治十五年朝鮮事變に遭遇せる武田尙氏を父としたる著者が花房家より委囑せられて花房義質公使十三回忌に當り成りたるもの、従つて花房家の覺書、關係史料を縦覽し、本事變遭難者の實歴談を聴取したるが故にその遭難の狀況、交渉に至つても、詳細に平明に論述せられた。附録として遭難者の中田敬義、久水三郎氏等の回顧小録を掲ぐ。

蓋し、明治年間の諸事件が早くも忘れられんことを時

明治外交史上重要な地位を占める朝鮮關係に今この好著を得たるを悦ぶが、其執筆の性質上、花房公使を中心となし、廣き展望—江華島事件、十五年、十七年の事變の關係推移、朝鮮國內の事情等を望み得ざるは止むを得ざる所か(四六版 圖版八、本文一〇三頁、非賣品)(寺尾)

●佐藤信淵に關する基礎的研究

羽仁 五郎著

「何人も變革を期待し、しかもあらゆる變革的運動と思想とが極致の彈壓のもとに一時的に屈服せしめられて居るいま、かの明治維新前期の民衆の意圖を代表した思想家の徹底的な理論と計畫と力とを日本國民の前に再び引出して來て見せることは、時宜に適して居る」といふ冒頭の一句は著者が本書に於て企圖したところ即ちその目的従つて又方法を殘るどころなく語つて居る。第一章傳記的敘述、第二章文獻批判、第三章歴史的理理解、その順序に従つて少しく内容を紹介するならば先づ信淵の生涯を叙して一面その時代と環境に及び次に彼が數多き著述